

第13回教育懇談会議事録

日時：平成28年8月16日（火）13:30～15:30

場所：愛知県庁本庁舎「正庁」

<大村知事>

本日は、大変お忙しい中、そしてまた大変お暑い中にもかかわらず、第13回目の教育懇談会に御出席いただきまして、ありがとうございます。

本日の参加者でございますが、学校法人河合塾の人事異動に伴いまして、今回から、中部本部長の宮本正生様に御出席いただきます。また、特別参加といたしまして、毎回御出席いただいております漫画家の江川達也様、ありがとうございます。そして、芸術教育が御専門の愛知教育大学名誉教授の藤江充様に御出席をいただきました。よろしくお願いたします。

さて、前回開催しました第12回の懇談会では、「児童生徒の市民性・社会性を高めるシティズンシップ教育のあり方」を御議論いただきました。

この夏の参議院議員選挙から、初めて、選挙権年齢が18歳になりましたが、その投票率は全国平均で45.45%と、50%を下回るものでした。愛知県全体の数値はまだ精査中ですが、こうした結果からも、子どもたちの政治参加への意識を高める主権者教育にはしっかり取り組んでいく必要があると考えておりまして、今後とも、皆様の意見を踏まえてしっかりやっていきたいと思っております。

そして、今日の懇談会の議題は、「子どもたちの感性を育む芸術・文化教育」についてでございます。

なかなか難しいテーマではありますが、子どもたちの感性に一層の磨きをかけていくということで、美術、音楽など芸術・文化教育のあり方を始め、子どもたちが芸術や文化に親しむ機会の拡大、国内外で活躍する芸術家の育成など、幅広い視点から御意見を伺ってまいりたいと考えております。

なお、愛知県では、先週の8月11日から国際芸術祭「あいちトリエンナーレ2016」が開幕をいたしました。10月23日までの1月半にわたり、名古屋と豊橋、岡崎で現代アートの国際展覧会を開催します。昨日は名古屋、今日は豊橋に出かけ、展示を見てまいりました。大変素晴らしい作品ばかりで、多くの皆さんに御覧いただければと思っています。

そして、10月29日から「第31回国民文化祭・あいち2016」、これは伝統芸能・文化等、幅広く盛り上げていく文化祭です。そして、12月3日からは、「第16回全国障害者芸術・文化祭あいち大会」を開催します。

今年は、大規模な全国レベルの展覧会、文化行事が、トリエンナーレ、国民文化祭、

全国障害者芸術・文化祭と12月まで切れ目なく続いてまいります。今年は、「芸術・アートの年」にしたいと思っておりますので、多くの皆様に御参加、そして御協力をお願い申し上げたいと思っております。お手元には、関連資料もお配りしておりますので、御覧いただければと思います。

今日は、皆様から、様々な見地、そして、御専門のお立場から、率直な御意見をお伺いできますようお願い申し上げまして、私からの御挨拶とさせていただきます。

よろしく願い申し上げます。

〔事務局から出席者紹介〕

<大村知事>

それでは、懇談会に入ります。

まずは、お手元の資料について、事務局から簡潔に説明をいたします。

〔事務局から資料説明〕

<大村知事>

それでは、委員の皆様から、「子どもたちの感性を育む芸術・文化教育」について、御意見を伺ってまいりたいと存じます。

まず最初に、芸術教育が御専門の藤江様から、芸術教育の意義などについて、御意見を伺いたいと思います。

それでは、藤江様、よろしく願いします。

<愛知教育大学名誉教授 藤江充氏>

よろしく願いします。

こうした委員会で芸術教育を取り上げていただいたことに、芸術教育の関係者として嬉しい限りです。

お手元にお配りした資料を御覧いただければと思います。資料の最初のページに、円グラフの図がございますが、まず、「学校教育」、「社会教育」、「産業文化教育」の3つを繋ぐものとしての「感性・アート」の芸術教育についてお話をし、そして具体的に愛知県の教育の中で、どのような形で展開していったらよいかということをご提案したいと思います。

最初に、「学校教育」と「社会教育」ということで、さきほど、県の担当者の方から御説明いただいた資料の中にもございましたが、実践の部分では「子ども美術館」とか鑑賞支援の取組みが、愛知県美術館がこれまでずっとやってきたこととの関連になります。

学校教育と社会教育については、割と愛知県でもうまくいっているものと思います。実際に、河合塾さんの資料にもありましたが、こういった60枚1セットの「アートカード」を作りまして、これを愛知県内の全部の小・中学校、一部の高等学校に配っています。

このカードを使った「アート・ゲーム」というのは、私たちが1992年に愛知・岐阜・三重の東海地区の美術館と学校の先生の研究組織として、「アミューズビジョン」という研究会をつくりまして、そこで私が提案して、今、全国に広まっているものです。

また、県立の盲学校、名古屋と岡崎にございますけれど、その校長先生にも参加していただいて、実際に、美術館の人が学校へ出かけて行ったり、生徒さんに来てもらったりして、こういった視覚障害者向けの鑑賞教材である触擦教材を作ったりもしています。ただ、残念ながら、美術館の予算はほとんどゼロでして、文化庁から、たまたま3年間、補助金をいただいたので、それを使って作成したものです。いろいろな形で、我々としても、学校と美術館が連携して芸術・文化教育を進めていくというスタンスを常に崩さないようにしています。これが最初の社会教育と学校教育との繋がりでの現況紹介でございます。

そして具体的な提案は、さきほど芸術家の育成ということもありましたけど、「アーティスト・イン・スクール」、「アーティスト・イン・レジデンス」ということを県の方でも制度化していただきたい。これはアメリカ、特に北米ではほとんどの州、自治体単位で、若手のアーティストを市が経営しているアパートみたいなところに住まわして、お金も出して、制作の場を提供し、その代り、アーティストが学校に出かけていったり、指導したり、制作現場に子どもが来たり、というような形でいろんなアーティストの養成や、学校、芸術教育支援、たとえば音楽のアーティストなら演奏技術の指導をするというシステムがあります。これは瀬戸市が、陶芸とガラスの作家を呼んで、だいたい半年か一年くらい住まわして制作をして、最後に展覧会をする例などあります。知事さんからもご紹介されましたトリエンナーレでも、作家が一回来て制作して直ぐ帰るのではなくて、一年間くらい愛知県のどこかの山の学校とか、そういうところに滞在して、そこで制作をし、地域の中で愛知県のイメージを作品に表現してもらったり、レジデンスの形で制作の場を保証することが必要ではないか。もちろん、県としては、すでに賞を出すとか、いろいろな作家育成の奨励策を実施されているということですけど、一時的に賞を出しておしまいではなくて、その後、アーティストたちの制作の場をどう保証していくか、これが一番大事だと思います。私も、非常勤で30年近く愛知県立芸大に行っていますが、若手の人達が大学を出た後、制作の場がなくなってしまうということがあります。それを少しでもなんとか作品を制作しながら、地域との連携、そして学校教育にもプラスになるような方法の一つが、「アーティスト・イン・スクール」や「アーティスト・イン・レジデンス」ではないかなということでご提案します。

それから、学校と美術館との連携は、愛知県美術館では鑑賞学習交流会というものをつくっていきまして、これも現場の先生方が手弁当で、交通費もなく自主的に集まっていたので、いろんな催しがあると、そこで、美術館での子どものワークショップや、レッスンをさせていただいたりする状況があります。

できれば現職の先生か、音楽も含め芸術関係のOBの先生が、美術館や芸文センターなどの中継ぎの窓口になって、学校との連携を進めるようにしてほしいと思います。これは三重県美術館、岐阜県美術館、その他、私が直接、担当者とお話をしただけでもいくつかの美術館にもそういう制度があります。こういうシステムがあれば、連携が一層スムーズに行くのかなと思います。現状としては、愛知県美術館と地域間の連携は非常にスムーズにいらしていると思います。今後の方向としてこういったことを提案したいと思います。以上が、学校教育と社会教育との連携例です。

次は「産業文化」という言葉を取り上げましたけれど、「産業文化」というのはあまり聞かないかもしれません。産業文化会館とか、豊田にも産業文化センターというものがございます。そこは科学館などと一緒ですが、「愛知の教育ビジョン2020」で目指す「愛知の人間像」の一つに、私が言うまでも皆さんの方がよくご存じですけど、「あいちを創る」「あいちの伝統と文化、ものづくりの精神を継承し、新たな価値を生み出すことのできる人間」がございます。これは学校の教科では技術、家庭科、または、数学、理科なども関わりますが、やはり芸術教科というものが大きな力になっていくと思います。「産業文化」と「芸術教育」とのつながりの例では、かつて名古屋市美術館で「ARTEC (アーティック)」という展覧会がございました。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、要するにテクノロジーとアートの融合です。メイテックというIT会社から基金を提供していただいて、何年かやったのですが、非常に良い展覧会で、全国から人が来ていたのですが、残念ながら現在は行われていません。そういうアートとテクノロジーとの連携は、まさに「愛知」ならではないかと思えます。自動車産業も、今はメカニカルよりもAI、人工知能とかそういったことが重要になります。テクノロジーをアート化する感性、アートをテクノロジー化する感性、これは現代アート、たぶん今回のトリエンナーレでもそういった作品が出ていると思いますけど、新しいテクノロジーを人間化するというような形で、テクノロジーをアート化する作品です。アートや、作者のイメージが、今のテクノロジーがあって初めてできる表現というものがあるんですね。そういったテクノロジーをアート化する、アートをテクノロジー化する両方の感性が必要だと。そこにはやはり「芸術教育」というものが大きな意味を持ってくるのではないかと。ということで具体的には、次の提案3の「メディア・アート」です。「メディア・アート」というのはいろんな意味がありますが、国の文化芸術振興基本法では、「メディア芸術」という言い方をしています。ちょうどこれが出てきた背景には、当時の新聞に出ていましたけれど、2002年、日本の鉄鋼輸出額の4倍の5,200億円をアニメ関連が稼ぎ出しているというこ

とが報じられていました。現在は、アニメもかつての勢いがありませんが、それでもメディア、人工知能も含めて、「メディア・アート」というものがきちっと、どこかで教えられなければいけないのではないかと思います。

オーストラリア、イタリア、スペイン、アメリカのいくつかの州では、ビジュアルアーツやミュージックなどと並んで「メディアアーツ」という教科があります。「メディア・アート」は、これから文系、理系関係なく融合していくような、まさに感性の部分で注目されている領域だと思います。大学レベルでは、そういう「メディア・アート」という言い方はしていませんけれども、筑波の総合造形、それから東京芸大の先端芸術表現科がこういった「メディア・アート」中心の内容で教育課程を組んでいます。先ほどいただいたトリエンナーレのパンフレットには、写真や絵にならないというか、映像が動かないと意味がないという事例が出ていますが、恐らくご覧になれば半数以上がいわゆる「メディア・アート」なんです。そういう意味からも、きちっとした「メディア・アート」の教育を推進していくというのは、ここ愛知県としての一つの方向性ではないかと。瀬戸の窯業高校にも電子機械科というのがあるようです。愛知県立大学でも東京芸大の先端とか筑波の総合みたいなものが少なくとも大学院レベルには必要ではないか。学生とかに話を聞きますと、従来のデザインとか所定の課題とかではなくて、こういうことをやりたいんだと進めると、そうすると従来のジャンルからはみ出すこともあるということです。そういったものにきちんと制作の場、コンピューターの施設・設備などが使える場を、保証していくことも一つかなと思います。

それで3番目の、「芸術教育」と「学校教育」との関わりですが、この「学校教育」が、「芸術教育」の要だと思います。「学校教育」の場合は、先ほど県で用意して頂いた資料の中でもありましたが、「芸術教育」の時間数が減ってきています。

3 ページを御覧ください。これは私が作った表ですが、赤字の線が全授業数に占める「芸術教育」の時間で、音楽と美術はまったく同じ時間なので、この割合というのは音楽科と考えられても、図工・美術科と考えられてもいいのですが、相対的にかなり減っています。これはいろんな理由がありますが、数字だけで言いますと減ってきている。ただ逆に実際にその授業を受けている子ども、児童・生徒に言わせると、実は音楽と美術というのが「非常に好きだ」と「楽しい」と答えている生徒が非常に多い。ページはありませんが、次の資料1というのが総授業数に占める芸術教科の割合のグラフです。その次のページの資料2をご覧ください。これは文科省の国立教育政策研究所が、「総合的な学習」に関して調査したデータです。小学校4年生から中3までの、好きな教科、「とても好き」、「まあ好き」というものを集計したのがこれです。赤い線が総合的な学習の時間で、だんだん中学校になると好感度が下がってくる。これをもとに総合的な学習の時間を少し減らすというようになったようですが、これを見ますと小学校、中学校とも体育が常にトップです。これは、ベネッセとか学研の調査でも大抵こういう傾向が

出ています。2位が図画工作で、それが美術科、中学校になると急にちょっと好感度が下がってしまうということもあります。下の方はベネッセの2006年の調査ですけれど、体育、理科、美術、音楽というのがやっぱり子どもたちの好きな教科の上位を占めています。

それから次の資料4をご覧ください。これは学研による調査例です。国立教育政策研究所の学習指導要領実施状況調査は、各教科の調査の際、教科毎にその教科が、「好き」か「嫌い」かを、聞くということで、複数回答が可能です。学研の場合は、複数回答は無く、どれか一つを選べという形でやっています。そうすると意外と算数がトップです。図画工作は3番目にあります。音楽は5番目。嫌いな科目はまた算数がトップです。体育が好きな科目で2位、嫌いな科目でも4位、ということで、二極化しているというのが分かります。平均していくと、好きな科目の上位は男子と女子の差が出ていますが、男子は算数、体育、図工で、女子は図工、国語、体育という形です。一番新しい国研のデータは、今年の2月くらいにネットで公表されたもので、体育はまだ公表されていないのですけれど、小学校の6年生について調べたものです。教科名を書いて、「何々の学習が好きか」と聞いて、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、これがいわゆる「好き」に入る。「どちらかといえば思わない」とか、「思わない」、「わからない」は「好き」に入らない、ということで集計しますと、国語54.4%、音楽68.1%、図工80.3%となります。たぶん体育が入ってくれば、体育は80%以上いくと思います。こういう好きな教科の中にやはり「音・美・体」がありますが、そうした傾向がベネッセの調査では中学生にもあるということと、芸術教科の実際の時間数とはずれがあるというか、教育は、消費ではありませんけど、学習者のニーズからいえば、ちょっとずれているのではないかと思います。

一番大事なことは、高校教育で、愛知県の場合は、人口流入の年齢構成で見ますと、中・高校生を伴う家族で赴任してくるという方が多いといった事情もあるようですが、資料6の文科省の資料によると、高校の教員一人当たりの生徒数が全国で最大値の15.5人となっています。全国平均では13.8人です。特に芸術に関してみますと、資料7ですが、非常勤講師が圧倒的に多いのですね。これは愛知県だけでなく、実は芸術というのはどの県も非常勤が多いのです。というのは高校の場合は音楽、美術、書道、工芸の4科目が芸術という1教科の中に入っています。芸術だけでも4人先生がいることになります。4人はとても雇えないという事情があると思うのですが、専任教員がやっているのが10.8%、146校のうち14、5校に芸術の専任教員がいるということです。数からいえば、私、三重大学にも8年いましたけれど、三重県の方が高校の芸術の専任教員のパーセンテージが高かったと記憶しています。このあたりも教員の採用枠など、芸術教育を進めるために拡充していただけたらなと思います。愛知県立芸術大学の美術の学生でも、高校の時に美術の時間がなかったという学生もいますので、そのあたりも考えて

いただけたらと思います。時間がありませんので、感性とは何か、といったところもお話ししたかったのですが、今回はそこを端折りまして、具体的なデータと提案ということでお話しさせていただきました。

<大村知事>

ありがとうございます。それでは後ほど御発言をよろしく願いいたします。それでは江口先生、お願いいたします。

<名古屋学院大学現代社会学部教授 江口忍氏>

最初に、学校に関する芸術・文化教育、私は県としてできることという視点で、お話ししたいと思います。例えば授業時間の話になると、指導要領の話になってまいります。そうすると県で何かということはなかなか無いと思います。学校という場で、県が主体的に関与できることとして、大きな役割を持つと思うのは部活動です。部活動の担当の先生の負担が大きくて大変だという報道もあり、一方でそういう問題はあると思います。子どもが小さい頃、文化・芸術に触れる場、時期として、子どもが生まれて一番最初に触れられるというのは、まず、親が音楽とか美術の習い事に行かせるという機会があります。それについてはそれぞれの家庭の経済的な状況ですとか、音楽教室に送り迎えをする人がいるかどうかで、文化・芸術に触れられるかどうかは個人差があります。大きくなって、小学校に入って音楽の授業を受けて、だんだん文化・芸術に関与してきて、本格的に主体的にこれをやりたいなと感じるのは中学校の部活動の場からではないかと思います。このタイミングになりますと、公の役割はたいへん重要で、音楽なんか典型だと思うのですが、音楽をやろうとすると道具にお金がかかる。演奏の場所が必要、指導する先生が必要、それから発表する場所や大会なんかも必要。そういうことを用意できるのは、やはり個人ではなく、官、公の役割だろうと思います。ですから基本的な考え方として、県が文化・芸術関係で学校に関われる中心的、重要な部分として、部活動を考えてもいいのではないかなと思います。私の母校の県立高校に和太鼓部がございませう。今年度からですが、そこの後援会に入ることになりまして、この学校が、先般広島で行われた全国総合文化祭に出場する機会を得ました。そこで先生方と話す機会がありまして、たいへん勉強になりましたのが、和太鼓の性質もあると思うのですが、地域の方々との協力、連携がすごく重要だと。すぐ近くに神社があるのですが、その保存会の方々が非常に熱心に指導をしてくださり、グッと技術的にレベルが上がり、高校生自身のモチベーションも上がったと。地域の方々の学校への関与、関心が非常に高まったと。

私は、元々、経済学、地域経済、地域政策を主にやっておりますので、今日のテーマとしては文化・芸術教育ということですが、一方で、地元の学校の文化部活動に地域の方々関わっていくことは、地域づくりという視点では、非常に大事なことだと思いま

す。ですから、この学校の和太鼓部の活動というのは、非常に上手くいっている例だと思います。それに関連して、例えば、瀬戸の高校に焼き物部はあるのだろうかとか、緑区の学校に絞り部はあるのだろうかとか、豊田とか、西三河でブラジル人の方がたくさんいる学校にサンバ部はあるのだろうかとか、調べてみたのですが、やはり無いんですね。あってもいいかなと思うのですが。

ここから先は、提案ですが、地域との関わりを深く持てるような部活動をやろうという学校が、出てきたとしたら、今でも制度的にあるかもしれませんが、県として、「ぜひ、やったらどうだ」と後押ししてやれる何かがあると、文化・芸術活動の裾野を広げるといふ部分では、役に立つのかなと思いました。以上です。

<大村知事>

ありがとうございました。

ちなみに、一週間前に、皇太子殿下にお越しいただきまして、安城では中学生の子どもたちに三河万歳を、郷土研究部というのがあるのですよ。中学生に、三河万歳を殿下の前で舞っていただきましたけど、大変好評でございました。

それでは、後藤様、お願いします。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

今日のテーマですが、なかなかおもしろいと思いつつも、広いなとちょっと感じました。それで、テーマについて、前段の方は「子どもたちの感性を育む」と読み取り、後半の方で「芸術・文化教育」というキーワードを拾いました。

まず、前段の方の「子どもたちの感性」について、述べたいと思います。いわゆる「豊かな感性を育てる」は、よく言われることですし、非常に重要です。ただ、本学は教師を育てていますから、学生自身も感性豊かな人になってほしいし、そういう子どもを育てるにはどうしていくのかということをお重要な課題として、育てていこうとしているところですが、やはり一抹の難しさを感じています。私自身は、社会福祉学部にも4年間教員で勤務したことがあり、障害をもった子どもたちと随分関わったりしました。そういう経験や、前には北海道教育大で教鞭をとりましたので、そこで出会った学生たちのこととか、そういう経験を通して、いろいろ思うなかで、感性教育で一番大事なことは、五感の覚醒である。育てるのではなく、覚醒だと思っています。そのなかでも、特に、皮膚感覚を大事にして、それから嗅覚、味覚を大事にすべきです。人が生きていくとき、安全とかを確認していくために大事な感覚で、生活機能としても大事な視覚や聴覚については、障害が明確であることもあり、注目されます。しかし、人が育っていく時の要になっていくところに、もうちょっと目を向けなければいけないものが、先ほど言ったような皮膚感覚であり、嗅覚、味覚というものがあると思っています。今日も

暑いですが、空調が完備されるなかで育っている子どもたちを含めて我々も、暑いなかで、どうやって生きていくかという、生きる力の育成に感性は、つながっていると思います。

例えば、環境の問題ですが、公衆衛生では、以前は悪臭の時代だった。それが、無臭になって、今は芳香の時代とも言います。笑い話のような話で、キンモクセイの香りを嗅いだ子供が、「キンモクセイの花だ」と言わずに、「トイレの臭いがする」と、お母さんに言ったと書かれていたのを読んだことがあります。それぐらい社会環境が便利になり、過しやすくなつては来ているが、その一面で、あるべき五感が育てられていないというか、あるべき感覚が呼び覚ますことが出来ないままに育っているかなと感じることが間々あります。そういう体験をどうやって小さい時から保証していくことができるかなと思っています。あとは、感じたことへの肯定、大人サイドで子供の感じ方を否定してしまうことがないように、「楽しい」という感覚が起きてくるような、そんな環境を作る必要があると思っています。

後段の「芸術・文化教育」についてですが、教育という言葉が付いていることへのこだわりですが、育てることの意味は何なのかが問われているのではと思っています。先ほど、学習指導要領の抜粋資料の御紹介もいただきましたが、そのなかでは、「日本文化を理解して継承させる」、「異文化を理解していろいろな人と協働する」という二つのことが主目的として書いてあります。これを愛知県の行政に落とした時に、「芸術・文化教育の目的は何なのか」ということが改めて問われているような気がしています。そのことは、先ほど、江口さんの方からもお話があったと思います。ねらいとして、はっきりさせていく必要があるのは、一人一人の隠された能力、さっきの感覚の覚醒と同じですが、隠れた能力を拓いていきたいという思いなのか、そうではなく、もっと産業にもつながっていくエキスパートを育てていきたいという思いなのか、これによって学校教育のねらいとか、方向性は相当に変わっていくのではないかと考えています。

本学は、美術とか音楽の教師を育てていますので、子どもたちの育ちに貢献していると思っています。しかしながら、先ほど藤江先生の方からデータが出たのは有り難いことなんですけど、採用枠が非常に少なく、一生懸命育てても、それを採っていただけない。ぜひ、よろしく大村知事には御検討いただきたいなど、いいデータを出していただけたと思って見ていました。そういうことで、子どもたちを育てていく教師がいるけれど、勤務できる場があまり無い。そこには矛盾が生じているんじゃないか、何とかしていただきたいと思っています。

その一方で、国策でもあると同時に、県の行政の将来ビジョンにもつながっていくことだと思うのですが、感性豊かな子どもを育てるということは、人としての育ちを求めていくことであって、さっき言ったように、その地域の文化であるとか日本の文化を継承していくのか、あるいは、産業とリンクしていくような人材を育てていくのかが問わ

れます。もし後者のようなことを計画するのであれば、芸術的な力を持った人たちが食べていける設計をぜひ考えていただく必要があると思っています。以前、スポーツのことが話題になったときにも同じようなことを言ったように思うのですが、すごく技能に優れて、好きで頑張る。では、その後、どういう将来がその人に待っているのか。県の芸大の卒業後の進路などもありましたが、卒業後の将来として、生涯を通じて職業としてどういう道がそこに保証されるのかという、そういう現実性が無ければ、ただただ育てることで一面的ではないかというふうに思っています。まさにキャリア教育につながる部分かと思っています。以上です。

<大村知事>

ありがとうございました。それでは柴山様、よろしく申し上げます。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

今日のテーマは、私のやっている仕事とは全く離れたところですので、素人の話をさせていただきます。企業の中でも、現地現物っていうのは非常に重要視されていて、そういう面では、県の方針の中でもいろいろなものを鑑賞したりというようなこともありますし、本物を見たり、本物に触れるということは非常に大事なことだと思いますので、これまでどおりやっていただきたいと思います。私どもも、企業の話聞いていますと、今の若い人というのは、コンピューターとかスマホでいろいろな情報とか知識を得て、いろいろな芸術作品とか海外のものなども色も鮮明にわかるので、何となく行ったような気になっているとか、知っているような気になっている部分がかかなり多いと言っています。若い人は特にそう見えているんですね。実際に企業で働くということになると、これは現実の世界ですし、実際のものを扱うということになってきますので、そこでのビジュアル、あるいはネットを通じた知識と現実の経験は全然違うわけです。こういう文化芸術の面でも、いろいろな本ですとか映像でも知っていることと、実際の本物を見て、その大きさとか質感、こういったものを感じるというのは非常に大事なことだと思うので、ぜひやっていただきたいということです。

それから、実は私ども経済団体で出前授業というものを、経済4団体で今、一緒に統合してやろうということをやっているんですが、こういう芸術とか文化教育についても外部の力を上手に使うということも大事なかなと思っています。例えば、学芸員の方ですとか、あるいは演奏家の方、実際にお招きしてそういった人の話を直に聞くと、子どもたちもより興味を持ったり、より知識も深まるということもあるかと思しますので、先生の専門知識を高めることも大事なことだと思いますけれども、より外の力を上手に使うということを考えていただきたいなと思います。以上です。

<愛知教育大学名誉教授 中野靖彦氏>

以前から考えていることがありまして、お話しさせていただきます。感性は、人や物に対する感覚だろうと思います。それが豊かに育っていることが重要です。よく感性と言うと、音楽や美術というところで育てるような感覚を持っていますが、この感性が本当に育つのはいつ頃からか。よく右脳と左脳と言いますよね。皆さん御存知のように、右脳が音楽などの感性を司っているわけです。左脳が理性です。右脳が原始脳です。原始脳の右脳があって、左脳がある。理性を司る左脳が早く成長すると、右脳が育たないという考え方があったようです。どういうことかと言いますと、小さい頃に楽しんで感じたままでいっても、段々大きくなると、特に学校教育に当てはまるのですが、枠の中に入って、色々と考えていかなければいけなくなる。そういう思考が働いてくると、実は感性はなかなか働かない、そういう考え方もあったようです。これがどこまで立証されているかはわかりません。ただ、日本の音楽家が世界に出たときに最もよく言われるのは、日本の音楽家はものすごいテクニックはあるけれども、感性がないということです。なぜそうなのかと言うと、例えば、バイオリンの「スズキ・メソード」というものがあります。その「スズキ・メソード」は日本よりも世界の方が売れています。なぜ日本ではそれほど受け入れられないのか。この「スズキ・メソード」は楽譜を読ませないのです。「スズキ・メソード」は、子どもたちが話しながら言葉を学んでいくので、そういうやり方をすれば子どもたちは音楽を自然に学んでいくという発想なのだそうです。

小さい頃にできるだけ素直に思ったものを書かせる。色々なことをさせているのです。ところが、年齢が上になると、この資料にもありますけれども、音楽に関する感性は音楽で育てる、図工の感性は図工の中で育てるとなってしまうている。実は、外国では、教科が分かれていない国が多いのです。総合的な面から学んで感性が育つと言われているので、各教科の枠の中で考えていったときに、なかなか広がっていかないのではないかと。そういう主張もあります。

東京芸術大学の管弦専攻では男子学生が少なくなってきたそうです。なぜかと言うと、東京芸大の人に聞いたのですが、男子学生は、将来のことを不安に思うと途中でやめてしまうのだそうです。これは、先ほど後藤先生が言われた、音楽家として生きていくという環境が育っていないこともあります。

小学4年生が分岐点と言われているように、親は小学4年生まではいろいろなことをさせます。水泳をやり、ピアノをやり、いろいろなことをやります。広く豊かに育ててほしいと思っても、小学5年生になると、みんな塾に通い始めるのだそうです。そういう中で、音楽や芸術の力を伸ばしたいという環境状況にあるかと言うと、そうではないというのが現実であると聞いています。

余談ですが、音痴の研究をしていた人がいまして、音楽家が育たない最も大きな原因

は、親が音痴であることだそうです。保護者を含めて周りの大人が、例えば、花を見て「わあ、きれい」という感覚がスッと出てこない、子どもにはなかなか通じない。日常の中で大人自身ももっとそういう体験をするべきだ。花のことを話しているより、一生懸命、スマホの何とかGOで探している親子がいましたけれども。やはり、今の時期はどんな花が咲いているのか、花を見たときに「わっ」と思っただけで感じるようなことを親子共々が感じないと。

先日、私はゴッホの「ひまわり」を学生に見せたのです。高校生や大学生になってから見るよりも、小さな頃からそういう感激をする体験をしていかないと、その体験が生きてこないのではないかと感じております。

外国の教育について、私はアメリカでこんな経験をしました。絵の教育です。「見たものを描きましょう」というもので、日本でもよく学校教育で行われています。「見たもの」を「描く」のですけれども、実は見たものを描いてはいません。どういうことかということ、日本人は必ず自分の枠組みで見るとのことです。学校ではどう教育しているかということ、絵を逆さまにします。逆さまにすることにより、あの絵はあれだというイメージを消していくのです。それで見たものを素直に描かせる教育をしていたのです。私達は見たものを素直に描きましょうと言われても、なかなかもう、自分の経験の枠の中に入ってしまっていますから、そこから抜けきっていきません。そういうことを感じました。

そういう教育により、見たままをパッと素直に出せるということも私は一つの大きな感性だと思います。そういう力をいかに小さい頃から伸ばしていくかということ。学校教育の中でできるだけそういう機会を持たせてあげる。そうすることがあれば、ずっと先に「音楽をやりたい」「絵を描いてみたい」「歌ってみたい」ということになり、好きこそもの上手なれという世界に入っていくのではないかと感じております。

<大村知事>

ありがとうございました。それでは、宮本様、どうぞ。

<学校法人河合塾中部本部長 宮本正生氏>

よろしく願いいたします。河合塾というと、大学受験の教科指導というイメージが強いと思いますが、我々としても、大学受験生だけではなく、幼児から小学生、中学生を対象に、いろいろなことを試みているわけでありまして。今回のテーマ「子どもたちの感性を育む芸術・文化教育」といったようなことについても、ごく一部ではありますが取り組みを行っておりますので、そのことについて紹介させていただきます。

資料を用意しましたので、御覧いただければと思います。リーフレットも用意させてもらいましたので、参考までに御覧ください。

私から二つ紹介させていただきます。一つは、河合塾には「河合塾美術研究所」があ

ります。ここは主に芸術系の大学、愛知県立芸術大学や東京芸術大学に進学を希望する生徒さんに指導するところです。

ちょうど10年前から「こども教室」を開いています。小学生を対象とした基本的には美術系の指導なのですが、単なる絵を描いたりということではなくて、それこそ子どもたちの感性を育むために、また、子どもたちの表現力を磨くために、どんなことができるかという観点から取り組んでいます。

ここで非常に大切にしているのは、実際に手を動かしたり、表現したり、実際の物に触れたりすることです。資料には「Act」「Basic」「Communication」と書いてあります。基礎的な力はもちろん育みますけれども、それと同時に、素材に実際に触れることや、他人とコミュニケーションを取ることも重視しています。冒頭紹介がありましたように、次期学習指導要領で取り上げられている「学力の3要素」、すなわち知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性などに、全てが繋がっていきます。また、大学入試についても、中教審の答申がありましたけれども、新しい大学入学者選抜の議論の中でも、「学力の3要素」が強調されています。それと同じようなことを、我々は10年前から子どもたちを相手に取り組んでいるということです。

例えば、3ページにカリキュラムを載せています。低学年コースと高学年コース、主に週一回コースですと、年間で34、5回の授業があります。このように各回でテーマを決めて取り組んでいます。次のページは低学年が取り組んでいる「ろうけつ染め」です。単に画用紙に絵を描くのではなく、和紙、水彩用具、「ろう」を使って、感性を磨きながら、実際に取り組んでいます。次のページは、高学年が対象のアートゲームを行っている様子です。壁に肖像画を複数枚貼り、子どもの背中にも貼り付けて、自分の背中に何が貼り付けられているかがわからない状態で、お互いにヒントを出し合いながら、どんな絵かを当てていきます。さらに、それを元に、今度はストーリーを作っていく。これが河合塾美術研究所での子どものための教育の取り組みの一例です。

もう一つ、河合塾としてはドルトンスクールがあります。これは幼児から小学生を対象にドルトンプランに基づいた教育を行う教室で、ニューヨークのドルトンスクールと提携しています。色々な学習を行っており、芸術に関わらず、色々なことを行って生徒の感性を磨いていきます。6ページの「5歳児が描く『世界の名画』」では、世界の名画のポスターを見せて、自分が感じたことを描かせるということをしています。模写ではなく、名画を見て生徒が感じたものを描きなさいと言っています。できれば描いた人はどんなことを感じたかを考えて、楽しんで描いてほしいと生徒に言っています。その作品の例が8ページにあります。元の絵は有名ですので、大体判ると思います。左が伊藤若冲、中が北斎、右がマネの絵です。元の絵を見て生徒達を感じたままを描いています。

さらに、このドルトンスクールでは、単に絵を描くだけではなくて、他の生徒の力にも結びつけていこうということで、別にライティングという授業も行います。楽しみな

がら、生徒達の言葉を使う力、聞く力を養う授業です。自分の描いた絵に基づいて、この絵に何を感じたか、どんなことを感じるかを、まずは単語や短い言葉でいくつか言わせた上で、詩の形にしていきます。8 ページの真ん中下に生徒が書いた文が出ています。5 歳児ですので、元の文はひらがなばかりで読みにくいものですから、ここは漢字混じり文にしてあります。

こうしたことを通して、子どもたちが素直に感じる、感じたことを自分の言葉で表現ができる、そういう力をつけていきたいと思っております。親御さんの中には、もっと勉強させてほしいという人がいたりもしますが、やはりこういう活動の中で総合的な力をつけていくことが、最終的には生徒が将来大学に進んで何かを学んでいく上で、最もベーシックな力になるのではないかと考えております。

<大村知事>

ありがとうございました。それでは、この中でもプロのアーティストとして、御意見をよろしくお願いします。

<漫画家 江川達也氏>

いま、大村知事からプロのアーティストと紹介されましたけど、私はアーティストではなく漫画家なので。これはこだわりたいところです。なぜそう言うかという、アートと漫画は全く逆なのではないか。

僕自身は愛知教育大学を卒業して先生になりました。実は数学の教師になったのですが、基本的に漫画家としての資質というのは文系の資質。ストーリーを作るという能力と、絵を描くという能力と、構成力という能力が必要なのです。実はこれは国語、社会。僕は歴史漫画を描いていますから。美術が本来培うであろう能力がないとできないはず。それを、専門の仕事として30年間やってきました。

なのに、なぜ僕は数学の先生をしていたのか、そういう矛盾が生じるのはどこかという、学校の国語、社会、美術は全く意味をなしていないという経験からです。

<大村知事>

言うと思った。

<漫画家 江川達也氏>

要は、僕自身、すごく絵が上手くて速くて、小学校、中学校くらいから漫画を描いていたので。ストーリーも作っていて、プロ並みだったのです。今のプロとしてみても、その頃に自分が描いた漫画を読んでも「あ、プロ並みだな」と。

一流のプロ並みの能力を持っていたのですが、学校に行くと全部否定される。要す

るに、ものを作る、ストーリーを作る能力を否定される。作文を書くと「こんな変なものを書くな」と言われる。中学校くらいまではデッサン力が先生よりもあったので、そこそこに評価されたのですけれども、高校に入ると、何かシュールな世界になってきて、何をもってアートとするのがよくわからなくて。美大とか、あり得ないと思ったのです。

国語、社会、美術とは関係のない数学だけが納得がいく。論理的に「なるほど」と思えることをやっていたので、数学科に行ったのですが。それ以外の教科はちょっとおかしいことを教えているのではないかと。点数が取れないのですよ。やはり論理的に考えると破綻しているから、点数が取れない。

美術教育だけ言わせてもらおうと、さっき、いみじくも愛教大の学長さんから問題提起が出たように、これは実は感性を育てる教育をするのか、即戦力、働ける教育をするのかというところで、はっきりしてほしい、みたいな提起が出たのですが。はっきり言って、今の学校教育というのは、戦力にならないのです、仕事としての。僕はアシスタントを美大出の人を使ったりしている。美大出の奴って、一番使えないです。何が使えないって、仕事がむちゃくちゃ遅い。要するに、美大で何をやっているかというところ、仕事にならないことばかり教えて、結局、「感性」を育てるのか、作品を「完成」させるのかどっちかってことになる。作品を完成させるのがプロなわけです。一週間で何十ページも描くわけですよ。そのスキルを育てている教育機関はほとんど無い。「時間をかけてもお前の感性を大事にせよ」と言うから、実際に仕事に使うときに「じゃこれ、こういう風に描いてね」「こういうパーツで描いてね」と言うと、「いや、僕の感性が」とか言うわけです。そうするともう全然使えないし。

今日本のアニメが衰退気味なのは、やはりそういう戦力にならない、力のない奴がどんどん増えて。宮崎駿さんも言ってたらしいのですが、「もう、最近若い奴使えねえ」って。何だろな、戦力よりも感性ばかり育てて、実際に使える人を育てていない。漫画の世界は一時期国際競争力を持っていたわけで、今でも少々持っているのですが。それは大体、先生から叱られて勝手に漫画描いてた奴が成長して来て。サブカルチャーなんですね、漫画って。表のカルチャーは明治以降、日本人の中で、西洋の猿真似みたいなもので。その表のカルチャーを美大とかで一生懸命教えるわけです。そうすると、それは実質の力を持っていないわけで、やはり日本古来の日本画的な、線で表現するものが日本人に合っているし、実力の世界に目覚めた人がアニメーションや漫画の方に来て力を発揮しているから。

結局、抜本的に、表層の世界にある、世界の評価を得るために作られたアートではなく、実質の日本古来の漫画やアニメーションを学校教育で即戦力になるぐらいの教育をしていかないと、これからの日本としてはダメなんじゃないかなと、自分としては思っています。やはり表のアートでいくのか、サブカルチャーの本来の日本的な漫画とかアニメー

ション教育でいくのかを、きちんと分けて議論しないといけないとすごく思うわけで。もしも教育改革をするのだったら、抜本的にアニメーションとか漫画とかそういうようなプロを育てるような教育を小学校のうちからやった方が将来のためになるのではないか。逆に、意外に愛知県出身の漫画家が多かったりして、愛知県民って意外にサブカルチャーに対しては、お金がかからないので、非常に興味を示している。学校教育の中に抜本的にアニメーションやら、漫画やらをぶちこんでいくということをする、特徴ある愛知の教育が可能なんじゃないかと私は思います。

<大村知事>

ありがとうございました。多分、学校教育を否定するだろうなと思ったら、期待どおりの御発言で、ありがとうございます。また後ほど、御発言いただきたいと思います。

それでは、またぐるっと回りまして、藤江先生から御発言をお願いします。

<愛知教育大学名誉教授 藤江充氏>

色々な御意見をありがとうございました。私は最初にお断りしましたがけれども、感性論のようなことを議論してしまうと深みにはまるので、あえて避けました。

実はこの感性の問題は、後藤先生が言われた問題がありまして、幼児教育と、今まさにおっしゃったような専門家教育とは、基本的に違うところがあるのです。幼児教育の感性は、幼児期の実際の体験を済ませておかないといけない。幼児期に関しては、触覚や身体感覚が大切になります。私が関係している美術教育の雑誌でも、「触るという体験」で特集を組みました。

中学校の美術教育が全然面白くなかったという話がありましたが、漫画特集をこの雑誌で2回やりましたけれども、中学校の実践が集まらないのです。学習指導要領には、御存知のように、漫画・イラストと書いてあるのですがけれども、実際に漫画を学校に持ってくるのは禁止されているところが多いみたいです。美術の授業のときは鞆に入れてきて、袋にしまって、美術の教室で開けて漫画を見る。

四コマ漫画をバラバラにして自分でストーリーを作るとか、色々な実践があることはあるのです。「まんが甲子園」もあります。漫画の話は専門家がいらっしゃるのです。ただ、漫画が美術教育の中でもかなり注目されていまして、京都精華大学ではおっしゃったような専門家を養成しています。

<漫画家 江川達也氏>

先生が三流なんです。

<愛知教育大学名誉教授 藤江充氏>

アートと漫画は違うとおっしゃったけど、「美術手帖」では3回くらい「アートは漫画か、漫画はアートか」をやっているのですね。あれは評論家達の空中戦のような形なのですけれども。

あともう一つ、さきほど産業との関わりという、「産業を育成するか、才能を育てるか」。これは二者択一ではなくて、実は感性というのは、大きく分けると二つあって、分析的な感性と総合的な感性。感性の定義は紛らわしいのですが、「感性」が使われるコンテキストで全然違う、むしろコンテキスト自体を集めて分類した方が、感性の意味がはっきりするので。

私が考えるのは、センサーとして、微妙な違いが判る、この手帳の色と机のこの部分とは、言葉で言えば同じ茶色ですけども、実は違いますね。このくらいはまだ判りますね。これが、微妙な千六百何十万色が出るというモニターがあったら、そこで三つの数字の一つだけ違う色を見ても、人間では識別できないわけです。ところが、鳩は人間が識別できないような微妙な色の違いを識別しているらしいのです。それも感性と呼ぶ人がいます。

そういったセンサーとして、分析して細かくどこまで違いが判るかという、そういう意味で「センス」「感性」を使っている人と、離れたものをくっつける水平思考というか、見立てというか、例えば、松尾芭蕉が「夏草や兵どもが夢のあと」と、時間と空間を超越した、場所を起点として昔と今をくっつけることから生まれてくるという、つまり、シュールかもしれないけれども、ニンジンとワインの瓶をくっつけて、マグリットが創ったような「ニンビン」みたいな、名前を付けられないもの、異質な物が実はどこかで繋がって、それをくっつけるという総合的・創造的な感性があります。

そういった二つがあって、それが芸術教育の中では、二つを実際には分けられないものですよね。その分析と総合の作業が行ったり来たりする精神の活動、それが一つの感性が働く場だと私は思っています。その感性というのは、例えば、将来、漫画家になろうと、エンジニアになろうと、プログラマーになろうと、ゲームデザイナーになろうと、アーティストになろうと、何か共通していること、部分と全体を一括して見るといったものが、共通しているのではないか。その根っこをきっちり押さえる。

アップルがアプリに賞を出していますがけれども、その賞を取った人がテレビで話していました。「いや、アプリを作るのはとても楽しい。自由なんです。この自由感は小学校の図工以来です。」と。アプリの開発と図工がそのようにどこかで繋がってくる。小学校の子どもが、図工をかなり楽しいと言っているのは、許された範囲の自由かもしれませんけれども、他に比べるとかなり自由な発想ができるからでしょう。それは、理系に進もうと、文系、アーティストになろうと、共通の部分があるのではないかと考えています。

アート・ゲームを紹介していただきましたけれども、これはかなり広範囲に広がって

います。(手にしたカードを示して) この愛知県美術館のカードもそのために作られました。名古屋市美術館が日本で最初に所蔵作品のカード化をしました。この原型はアメリカにあります、アメリカのものとは全然違う、日本独自の発達をしています。それはまた時間があれば御紹介いたします。以上です。

<大村知事>

はい。では江口さん。

<名古屋学院大学現代社会学部教授 江口忍氏>

最初の発言の機会の時には学校関係の話をしましたので、今回は学校以外の教育・芸術文化教育から広げて政策みたいなところを含めてお話ししたいと思います。

私は、岐阜県民で、岐阜市に住んでいるものですから、岐阜市との対比という点でこの愛知県について感じるところについて述べさせていただこうと思います。私は、たまたま住んでいる場所が、岐阜県美術館のすぐ近所です。何かと美術館で何をやっているかということに触れる関係上、情報も入ってくるので、ちょっとバイアスがかかってしまうかも知れませんが、その点、御容赦いただきたいと思います。何が言いたいかと申しますと、岐阜県特に岐阜市あたりは非常に芸術、市民レベルの芸術活動が合ったという感じがします。なぜかと申しますと、何と云っても地元出身の日比野克彦さんという方がいらっしゃるのですが、岐阜市御出身で、ダンボールアートというのをやっていらっしゃる方で、よく市民と一緒にダンボールで何か作ろうと、ずいぶん昔から活動されている方で、メディアにもよく出られる有名な方です。その方が、現在、岐阜県美術館の館長をされておられます。非常勤ですが、非常に外交的と言いますか、アクティブな方です。その方が中心になって様々な活動を岐阜県、岐阜市あたりでやっていらっしゃる。愛知県と岐阜県を比べるのは、少し無理筋な部分があつて、というのは愛知県と比べますと、岐阜県は人口4分の1しかおりません。県庁所在地も岐阜市は、40万ですから名古屋に比べれば5分の1以下というサイズです。愛知と比べて、小ぶりなサイズ感がこういった芸術活動には適しているのかなという気がします。逆に言うと、愛知県は非常に巨大な自治体で、大きなコンサートホールもあつて、それもいくつもあり、県立の芸術大学までもっている。そういう芸術インフラというのはしっかりしている。その一方で、やや芸術文化というのが大げさなこと、ちょっと縁遠いと感じてしまうところがあるのではないかなという感じがします。例えば、今まさに始まったトリエンナーレ、まあトリエンナーレは本当に何回も回を重ねて、だんだん規模も大きくなって前回の時には外国の方も多くトリエンナーレに参加して、見に来ておられたという印象がありますけれども、現代アートというテーマ上の問題もあるかもしれませんが、何か凄そうなんだけれども、何か近寄りたいたいなという感じがするんじゃないか。その点、岐

岐阜県がやっている、岐阜県で行われている様々な芸術的な活動というのは、もう少しべちちゃったというか、普通というのか、誰でも入っていけるような敷居の低さというのがあるような気がします。あと、名古屋では、市内の各地に小さなホールがあり、そういった所が様々な芸術活動の中心になって、地域での芸術活動の中心になっていくと思いますが、ここで「何をしろ」と申し上げるわけではないですが、冒頭の発言の機会に「学校の部活動を地元の様々な活動に絡めて伸ばしていったらいいんじゃないか」というお話をしましたが、もう少し地域的な小さなサイズでいろいろやっていけることがあってもよいのではないかと思います。

それからもう一つ、これは付け足しなんですけども、愛知県と岐阜県でもう一つ違うなと思うのは、事務局さんの方から出していただいていた芸術系の学校のことです。愛知県に関していうと音楽科は、県立の明和と市立の菊里、それから美術科は県立の旭丘と、どこも入るのが難しい。県立の明和や菊里の音楽科に行こうと思うと、小さな頃からバイオリンとかピアノをワーとやって、一生懸命そこを目指すという感じです。それはやっぱり7百数十万の県民が、音楽で食っていこう、スペシャリストになろうということになると、明和高校や菊里高校の音楽科を目指そうということになるわけですから、難関になるのは当然だと思うのですが、その点、岐阜県では加納高校に音楽科と美術科が両方あって、各40人ずつです。他には公立、県立では無かったと思うのですが、愛知よりももちろん少ないわけです。人口が少ない分、身近な分、要するに入りやすいという感じがあります。そこを出た人たちもそれぞれ地元で、顔が見えるような存在として、様々な芸術活動に携わっているように感じます。そういった点では、この資料の中で新たに東郷高校の芸術コースとか、名古屋西高校の創造表現コースとか音楽科、本ちゃんの音楽科とは少し違うレベルでの芸術教育の場が用意されているということで、これはすごく良い方向だと思うのですが、位置的な部分では、尾張部に集中しているという感否めないで、県全体の中でバランスの取れた配置も考えてもよいのではないかと思います。話はまとまりませんでしたけれども、以上で終わります。

<大村知事>

はい、ありがとうございました。それでは次、後藤先生お願いします。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

お二人の話とはちょっと繋がっていないのかもしれませんが、今日、私自身の収穫としてですが、お話をいろいろ聞きながら思ったことがあります。本学にも留学生が来たり、ショートステイで短期滞在の学生達が海外から来たりしていますが、そういう人と話すと、日本に興味があるし、教育大にも興味があって来ている人達だということは当然で、さらに、すごく日本の歴史とか文化とかに詳しくて、例えば愛知県だったら、三

英傑の話をし、片言の日本語で「トヨトミ・・・」と最後まで言えなかったとしても、興味を持ってくれているのがわかります。

そういう人達と関わっている時に、先程中野先生や、確か江川先生の話もそうなのかな、と思って聞いたんですが、いわゆる学校の教育の中で、どうしても本日のようなテーマだと、教科としての音楽、美術に期待を寄せるのですが、それだけではなくて、例えば社会科とかの関連教科と合わせることで、美術とか音楽の理解を深めるものになるのではないかと思います。

つまり、絵をどういうふうを描くとか、描いたらどうかとかいうことではなくて、先程、柴山さんもいいものを見せる、本物に触れるという話をされていましたが、絵を見てすごいとか、作品を見て感じる心を育てるには、描かれた絵の背景にあることとか、描いてあることの意味は何なのかを知ることによって理解が深まっていくかと。だけど、あまり関連づけた教育をしていないのではないかと。

教科の枠を越えることが大事で、本当に子どもたちを育てていくと思うのであれば、いろんな知識とか、知識と言うよりも生き様かもしれません、先人達の生き様みたいなものが文化を醸し出しているとするなら、そういったものがきちんと繋がり合うような教育というものを考えなければいけないと思います。

だから、学習指導要領にある教科の学習は一つとして、それとは別に地域というもののカラーが感じられるような、そこで生きた人達の、先人の知恵とか生き様が感じられるような関連教科みたいな、総合的な時間を使いながらやっていくことが必要かなという感じさせていただきました。努力したいと思います。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

今度は少し、中学校、高校の美術の時間について、私の個人的な思いを申し上げたいと思います。先日、厚生労働省から「2035年の働き方」という報告書が出ました。これは、あと20年後の我々日本人の働き方はどうあるべきかというものを示した報告書なんですが、この先AIとか、IOTとかがさらに進むと、今やっている仕事も随分変わってくる。その中で多くの方は、より専門性の高い仕事、逆に言うと、コンピューターができないような仕事に変わっていかねばならないということが書かれています。

その中で重要なのは、創造性とか、感性とか、人間的なものが重要になると書かれているわけですが、そういうようなことを、芸術とか美術とか、こういうところの時間で養っていかないと、今みたいに答えがあることを繰り返し繰り返しやっているような授業、あるいは知識、こういったことは、おそらくコンピューターに取って代わられることになるのではないかと思います。

そういう面では、高校とか中学の時期の芸術の時間を、単に美術とか音楽ということにとらわれずに、もう少しものの考え方とか、そういったことを養う場に使っていただ

くと、これから子ども達が世に出て、下手をすればコンピューターと競争しなければならない中で、役に立つスキルを身に付けていければと思いました。

<愛知教育大学名誉教授 中野靖彦氏>

先ほど言ったいろいろな感性、人に対する感性であるとか、心豊かな人間性と言われている、そういうものを育てるのが、多くの、全部の子どもに身に付けさせるのが、やはり、私は学校教育だと思っています。だんだん、上に上がっていった時に、それぞれ自分の興味もてる課題というのが、幅広い進路が可能かどうかという問題になってくると思う。ただ、自分が選べる段階になった時に、小さい頃からの感性が育っていなければ、選ぶようにも選べないわけです。例えば、日本は、割と英才教育を嫌ってきました。小さい時からあるものをやると、先ほど言ったように、将来の不安があり、なかなか音楽だけには向かわせないとか、そういう状況が起こっているわけです。結局、学校教育の中で、本当に豊かな基礎的な能力がなければ、その先創造的な思考はないと言われていきますので、そういう面では学校教育の中でしっかり身に付けて、その後の進路をどうするか。その時に、周りの雰囲気、指導者、あるいは環境がどう整っているかということが、問題になってくるのだと思う。

私は、江川さんの学校教育の否定、たぶんいつも出てくるので、ただ否定してきて、私は「否定したから成長している」といつも言うの。例えば、全てが学校教育に入ってしまったら、江川さんみたいな人は出ないわけです。ある面では、だから、ある面では、例えば、枠にとらわれなくて、自分でやっていこうというタイプが出てきても、私は良いと思っている。そういうところができるような高等教育、環境づくりが、私はどうしても必要であると思っています。先ほど出ましたが、今、芸大を出ても本当のプロになかなかかなりにくいとも言われている。芸大に行きながら他のところに行く。専門の、例えばある人の指導を受けているわけです。それは自分で探していくから、それで伸びるわけです。芸大へ行ったら、芸大の中のプログラムだけで生きていたら、たぶんなれないと言われているのが、現状でしょう。だから、そういうことを自分で、やっぱり探していけるような、そういうたくましい子どもを育てるのは、学校教育で生きる力を養成してきたからです。その辺のところを私は、学校教育をしっかり見た上で、進路をしっかり見据えるような形での教育、やはり選択の幅を広げていくというのが一番重要なことではないかと思っています。

<学校法人河合塾中部本部長 宮本正生氏>

本当にいろいろと勉強になりましたが、先生方がいろいろおっしゃっていることというのは、やはり、今回のテーマが、感性を育むということなんですが、必ずしも生徒がみんな芸術家になるわけでもなければ、美術とか音楽を職業とするわけでもなく、むしろ

ろそうでない生徒が大半なのですが、やはり小さいうちに本物に触れて感性を磨くということが、その後のいろんなことに繋がっていくんだろうと思っています。最初の方で後藤先生の方から、「子どもたちが原始的な感覚をちょっと失っている部分もあるんじゃないか」とかいうお話もありましたし、確かにそれは、今の世の中ではそういうことがありがちなんだなと思いますけれども、そういった中で、生徒はやっぱり自分たちで実際の本物を見たり、触れたり、考えたり、作ったり、表現したりということで、いろんな見方、力を付けていく。あるいは、それで他人と協働していろいろなものを作っていく力を付けていく。さっき江川先生から「美大出身者は使えない」みたいな話がありましたが、それは絵がうまい、下手というのはもちろんあるのですが、人と協力して何かを作るとか、締切までに完成させなければいけないとかいうことも、やはりそれは教育によって培うべき力だと思うので、そういったことも含めていろいろなことを学び、加点としてこういった美術や音楽の教育が活かされていく部分があるのではないかなと思っています。

ちょっと我々の仕事に引き寄せる話をしてしまって恐縮なんですけど、大学入試や、学習指導要領が大きく変わろうとする中で、実は河合塾でも、今ちょうど夏休みで夏期講習をやっている、アクティブラーニングを取り入れた講座もやっているのですが、最初のうちはなかなかうまく対話や発表ができない生徒も中にはいて、もじもじしてしまったりとか、自分からなかなか発言がしにくかったりというケースがあります。しかし、幼い頃から、こういった教育、芸術的な教育も含めて、論理教育を通して子どもたちがお互いに協力し合ったり発言し合ったり、いろんなものを教え合ったり意見を言い合ったりしていくことがあれば、そういった力を持つ生徒がどんどん増えていくのではないかと、私としては期待していますので、そういう点で我々としても取り組みを強化していきたいと思っています。

それからやっぱり、芸術のことだけに限らず、例えば、数学の定理を美しいと思ったり、自然界の法則を美しいと思ったり、そこにアートを見たりみたいなこともあろうかと思っています。そういった意味での感性を磨くということも必要なんじゃないかと思っています。これも一番大切なのは、藤江先生がおっしゃったと思いますが、面白いと思うようなところ、楽しいと思うようなことが非常に大切ではないかと思っています。私は江川先生と違って、学校の成績は悪かったのですが、それほど学校を嫌いではなくて、「つまんねえな」と思うこともたくさんあったのですが、それなりに面白いと思うこともいろいろあって、学校教育の中でもやはり本物を見せる、指導するということが、生徒の興味関心を引き出して力を伸ばしていくということは、今後とも変わらないのではないかなと思っていますので、ここにいらっしゃる先生方には、ぜひ今後とも御尽力いただければと思っています。よろしく申し上げます。

<大村知事>

ありがとうございました。それでは江川さんどうぞ。

<漫画家 江川達也氏>

僕自身は、感性を育てるよりも、足りないのは創造力だと思うのです。感じるとかそういうものは、それも必要なんだけど、モノを作るといって、何もないところから創造するという力を育てる部分が学校教育には足りなかったのではないかと。子どもっぽくない絵を描くということをしごく批判されたのです。俺は、俺の感性で大人っぽい絵を描いて、しかもパースがきちっとしていないと気が済まないんで、ちょっと数学に通じるのですが、見えるものを見るように描くと子どもっぽくないと言われるわけです。そういう意味で、写実性が好きだったので、音楽の先生や美術の先生に感じていたことは、「こいつら頭が悪いな」としごく思っていて、ただ、「数学の先生は頭がいいな」と思えたのです。音楽の先生や美術の先生があまりにも分析力が足りなさ過ぎて、物事を論理的に考えない奴が多くて、最近の坂本龍一さんの発言なんか見ていると、本当に頭が悪いのに教授をやっているのかというくらい、びっくりするわけです。そういう意味で感性とか想像力とかを育てるにしても、論理的なバックボーンにおいて、感性を育てるといふような、教育者の方は、ちゃんと分析的に見て、どうしたら想像力が育つかということのことをちゃんと考えないといけないなということをしごく思っています。

ぶっちゃけ、言っちゃおうと、自分は子どものうちから漫画を描かせるというようなものを、きちんとしたプロの能力のある人の指導のもとにカリキュラムを作るべきだと思います。感性とか感覚で描いている人が多いのですが、ある種の論理的なバックボーンは作れるはずなので、論理的なバックボーンを元にして、漫画の教育をした方がいい。具体的に何を描いたらいいかわからないと言われるので、歴史漫画とか、教育漫画を生徒に描かせればいい。数学漫画だとか理科漫画だとか、学校で教えるような内容を、生徒に漫画を描かせることでやらせれば、作る費用がかからないという一挙両得の状態になる。その中でいい漫画だけを皆に配ってやれば、教科書を作る必要がないし、毎回、生徒がいろいろなものを覚えてそれを漫画にしてみんなに広めるという形をやれば、年々、質が段々と向上していくし、もう一つは漫画というものは一番お金のかからない伝達手段なのですけれど、最近だと動画も簡単に作れるようになるのだから、生徒たちに学習動画みたいなものを作らせる。アプリもきちんと教えれば、できる人は作れると思う。できない人は全然できないけど、小学生に教えれば、大体、プログラムを作れる奴は、学年に5人は頭のいい奴がいるはずなので。要するに得意、不得意があるはずなので、得意なものを指導して伸ばしてモノを作らせる。何でもいから、生徒に徹底的にいろいろな課題を与えて、どんどんモノづくりをさせる、即戦力の人間を育てていくという教育が今まで全くなかったし、できる奴はどんどん伸ばして、作らせていくとい

うことを本当にやるべきだと思います。そうすれば、10年、20年後の愛知県の産業界はすべて、何でもかんでも新しいものを作るという能力が広がってくる。即戦力というか、創造性を、実際に創造させるという活動を通して付けさせるということが、やはり力を持たせる教育なのではないかと思います。

<大村知事>

ありがとうございました。そろそろ時間がまいりましたが、さらに御発言があれば。藤江先生どうぞ。

<愛知教育大学名誉教授 藤江充氏>

漫画の教育とおっしゃっているが、漫画による教育ということではよろしいですか。小学生全員が漫画家になるわけではないですよね。

<漫画家 江川達也氏>

要するに読み書きソロバンみたいな感じで、読んだり書いたりするじゃないですか。皆、普通に読んだり書いたりできるように、漫画が自由に使えるくらいの教育をした方がいいのではないかと。実際、昔は紙と鉛筆とか、そういうものしか無かったから、それでも北斎漫画とかがあって、皆、漫画が普通に描けるようになっていたのです。それを要するに、読み書きソロバン、漫画みたいな感じで、当たり前前のツールとして使えるような子供を育てていくのもいいのではないかとということです。

<愛知教育大学名誉教授 藤江充氏>

漫画というものは、私も高校の非常勤講師で授業やったり、今、学生にもやったりしていますが、やたらと頭を使うのですね。御存じのとおり。

<漫画家 江川達也氏>

本当にいろんな力が要ります。

<愛知教育大学名誉教授 藤江充氏>

ですから、そういう意味で「エデュケーション・スルー・マンガ」というのは、一つの考え方としてあると思います。京都精華大学の学長で漫画家の方とお話した時その話が出ました。また、統合カリキュラムの実践例ですが、今、台湾では、「アート・アンド・ヒューマニティーズ」という教科の中で文学も音楽も美術も演劇も一緒に教科書になりましたが、次には、また、元に戻るようです。そういう総合的な表現、技術を、意欲を高めてやるという意味では、「エデュケーション・スルー・マンガ」というような

ものも有り得るのかなと思います。

<漫画家 江川達也氏>

多分、カリキュラムを作っている人が、創造性がない人が作っていたから、自分の経験のないものをやらせようとするから、ダメなんじゃないかと思います。

<愛知教育大学名誉教授 藤江充氏>

まあ、ちょっといろいろありますが、トリエンナーレの話で岐阜との比較をされました。岐阜はもう一件、愛知と違う特色がありまして、メディア関係が非常に盛んです。大垣にもありますが。ずっと以前の知事さんがハイビジョン推進協議会の会長をなさっていて、当時、高山の方にハイビジョンを車で持っていくというようなこともやっています。地形の問題なんかもあるかと思いますが、それぞれの県の特色があっていると思います。是非、愛知のほうも、「アーティスト・イン・スクール」を、若手養成のために非常に有効だと思いますので、また、メディアのほうも、岐阜、三重とかで考えずに、東海地区のベクトルの中で、メディア産業みたいなものを、産業と言っても、人材養成ということだけでなく、モノを作るということは、発想や構想で、全てに共通する基礎だと思うのです。この前、中電の方に聞きましたら、電力使用量が、愛知県が大阪を超えたと言っていました。つまり、それだけ産業、工業が盛んだということで、この地域の特性というのは、やはりそこに一つある。そのあたりを教科としての芸術というよりも、もっと広く感性を育てる、その中には、音楽や美術がある。場合によっては、河合塾さんがやっている、トライデントがあります。トライデントは専門学校ですが、マンガ科もあるのですね。そういったものを県の産業と結び付けて、方針を打ち出していくということでやっていただけると、関連で芸術教育というものも、見直されるかなと思います。

<大村知事>

中野先生どうぞ。

<愛知教育大学名誉教授 中野靖彦氏>

絵で描く、絵日記を文章にするとか、これまで、少し視点を変えて、違った能力を引き出すようなことが行われています。幅広く、色々なところで取り入れていく、一つのやり方として。私は総合的な学習の時間というのは、そうやるべきところだと前から思っていました。その辺含めて変わってきているじゃないかと。その辺は、河合塾さんの方が、よくご存知かと思いますが、まあちょっとそんなことを感じました。

<大村知事>

はい、ありがとうございました。よろしいですか。

今日は、貴重な有意義な御意見をたくさんいただきまして、ありがとうございました。

学校における音楽、図工、美術、私は子どもの頃、楽しかったけどね。それだけ憶えていますけど、楽しいと思っていました。子どもの頃、絵が上手かったのですよ、私は、子どもの頃は。

体験を踏まえた貴重な御意見をたくさんいただき、ありがとうございました。今後の愛知の教育と、芸術文化教育の施策に生かしていければと思っておりますので今後ともよろしく願いいたします。今日はお忙しい中、本当にありがとうございました。

また、あいちトリエンナーレも御覧いただければと思います。よろしく願いいたします。